

「コロナ禍における子どもたちの心身の健康課題を分析し

保健実践から学校教育活動が果たすべき役割を考える」

高松 葉子

1、はじめに

新型コロナウイルス感染症は、発生から2年経過した今も世界中で猛威を振るい、生活に影響を与え続けています。その間、日本では経済活動の制裁などによる格差が増大し、貧困や孤立が広がり、子どもや女性の自殺が増え、不安と不満、諦めが大きくなっています。

学校では、度重なる緊急事態宣言や感染症対策のために行事や学習内容の縮小、延期・中止、黙食、少年団活動や部活動、異学年交流やPTA活動（家庭訪問、参観日や懇談会）の中止や縮小が進み、子どもたちにとっては楽しい行事や楽しい学習の減った「つまらない日常」が続いている気がしてなりません。

今の小学1、2年生は、約2年間、体育館で一度も全校集会をしたことがありません。校歌を全員で歌ったこともないし、聞いたこともないです。子どもも親も先生方もマスク越しにしか顔を見ていないし、密に触れ合うこともできません。保護者アンケートに「先生方の顔と名前が一致しない。」と記入されました。2020年度は休校と分散登校などのせいで子どもたちの体力低下が目立ち、病院受診のけがが急増し、生活リズムの変化による不登校気味の子どもの増加がありました。

子どもたちには親戚や祖父母との触れ合い等、様々な体験の減少を感じています。子どもたちが生活の中で活動や外出を制限されるほど、ゲームやネット、動画にはまる割合が多くなる気がします。「学校という公的な場で楽しみながら、体や体力・学力や経験を育て、友達と関わりながら社会性を育てる」ことは、子どもにも親にも重要なことだと考えます。

昨年度、休校明けにマスクを忘れ、「貸してください。」と言うことが嫌で、1時間校内を走り回って逃げていた1年生は、今年の学校発表会に群読を大声で表現できるようになりました。反面、粒ぞろいと言われて入学した今年の1年生はぜんぜん話を聞けずに怒られてばかりいます。そこに簡単にいかない教育の難しさを感じています。

そんな中で子どもたちの生の声を聴き、不安に寄り添い、生きづらさを支えるために保健室の役割はどんどん大きくなっていると感じています。さらに、先生方の大変さに寄り添い、ねぎらい、先生方につなぐことも保健室が機能するために必要になってきているように思えます。コロナの感染症対策でも求められることが多岐にわたり、保健室の果たすべき役割は大きくなる一方です。

だからこそ、私たち養護教諭自身も体と心の健康が、かつてないほど必要になってきます。互いの学校や子どもの実態や状況を語り合い、「愚痴も集まれば要求！」になります。明日

の実践につなげるために「今、感じているたくさんの思い」を言葉にして伝えあいましょう。皆さんで討議を深め、実りあるものにしていきたいと思います。 【道教組養護教員部】

2、実践報告から

(1) 1年リレー学習について S氏（檜山教職員組合）

小学校1年生の体育授業でリレーについての学習指導を行った。単なる短距離走であれば子ども一人一人の技術により成立してしまうが、リレーとなるとバトンの受け渡しの技術とともに他者との協力が必要となる。子どもたちを5人ずつの班に分け、学習前のタイムを測定し、班ごとにタイム目標を決めて班学習を行った。子どもからは他の班と競い合いたいという要望もでたが、あくまでも班ごとのタイムの向上にこだわることで、子どもたちの視点を班内に向けさせる工夫もなされている。1年生でリレーの基礎を学ぶことがその後の技術の向上につながるものであるし、何より子ども同士が話し合い考え工夫し合うプロセスが多く学びをもたらす実践である。

(2) 5年保健学習「心の健康」の取り組みについて M氏（後志教職員組合）

養護教諭がTIとして授業計画を立て、担任と一緒に学習することで学習支援してもらう全4時間の保健学習である。思春期の入り口に立つ子どもたちに、心の健康について考えさせ心の成長について学ぶ授業である。イメージしづらい心の有り様を絵に描くことで見える化し、誰でも様々な感情を抱きながら生きていることを理解し、思春期を通して大人になるための心の成長を考える。班で話し合い発表させることで、子ども一人一人が主体的に学習している。子どもたちに考えさせる授業の工夫が随所に見られており、自分の気持ちをうまく言語化できない小学生の子どもたちにとって、不安感情やストレスの理解と解消につながる「心の健康」の授業となっている。

(3) つながる保健室を目指して T氏（檜山教職員組合）

児童とのつながりとして、健康診断、健康相談、宿泊研修や修学旅行の事前指導、掲示物指導等の実践、教職員とのつながりとして、視力低下の保健指導、保健室利用報告の実践が報告された。「いかに保健室を利用してもらえるかが学校運営に携わることにつながる」というTさんは、部活動指導にも力を入れ、教職員からの健康相談にも親身に対応する。そのような姿勢が養護教諭への信頼に繋がっている。一人職種だからこそ、まわりの人たちとつながることの大切さを考え、「一人ではできないことも情報を共有することでできること

がある」と語っている。学校の子どもたちと教職員をサポートしつなげることの大切さを改めて確認した。

(4) 養護教諭として「高校生アンケート」を読み解いてみたら H氏（道高教組）

高教組札幌支部の協力のもと高校生アンケートを実施し 367 名の声をまとめた。書いてあることより書いていないことが問題である。「いま、大人に一番言いたいことは？」の回答では「なし」と記載なしが 33%であった。加えて回答があったうちの 33%が大人に対する批判であった。批判や不満でも回答してくれるうちはボールを投げかけているだけよい。その反応に応答できないでいるとそのうち回路は閉じてしまうと危惧する。

保健室で出会った子どもたちとの関わりが、高校を離れてからも続くケースがある。特に生活困難家庭や育ちの家庭すらない子どもたちの自立は難しく、社会的弱者になりがちである。そのような子どもたちに長年に渡り寄り添う H さんの姿がある。

(5) 高校生の情報通信機器による健康障害について M氏（道高教組）

内閣府調査では、高校生の 99.1%が自分専用のスマホを持っており、ネット依存率は 19.3%から 28.5%に増加している。学校での調査では 3 時間以上利用している者が 80%、そのうち 6 時間以上の者が 30%であった。子どもたちには、学習時間、睡眠時間を犠牲にしているという認識がある。指導するポイントとして、健康上の問題、使用時間、金銭的な制限、学校での使用マナー等があげられる。コロナ禍での遠隔授業実施で急速に学習の ICT 活用が進み、今後さらに加速するであろう。学校で使用に関する指導の整備を行うのは急務である。

(6) 中学校の保健委員会活動 W氏（宗谷教職員組合）

感染症に関する誹謗中傷をなくす取り組みである「シトラスリボンプロジェクト」を通して保健委員会活動を活性化し発展させた実践である。このプロジェクトは校内活動に留まらず同じ地区の小学校や高校のボランティア部にも影響を与え、活動の様子が新聞に掲載されるまでになった。W さんは、なにより子どもたちの姿勢が積極的になったのがうれしいと語る。活動の中で成長していった子どもたちの様子が伺える。科学的知識を仲間と共に学び、様々な人とつながり活動すること、これらは子どもたちに多くの学びをもたらしたと言える。活動の輪はまだまだ大きく広がっていくであろう。

3、討議から

【コロナ禍】

コロナ禍における分散登校休業措置や学校行事の変更が現場の子どもたちに与えた影響は計り知れない。今回のレポートからも見えているが、各地域の保健室から聞かれる子どもたちの健康課題は多種多様である。そして身体はもとより心の発達課題は時間が経つにつれて大きくなっている。学校の授業と行事は車の両輪であり、学校における様々な教育活動から下の学年は学び、やがて自分たちが同様の活動を広げていく。その過程で子どもたちは多くの経験をもとに学び成長する。そのサイクルがコロナ禍で分断され、行事を一から作るような思いで切り盛りしている現状がある。それは小中学校だけでなく高校の現場でも同様である。「今年の生徒会は動きが悪い」と平気で口にする者がいるが、それは学ぶ機会なく大きな行事を運営しなければならなくなった今の生徒たちが努力している姿である。子どもたちの心身の成長と学校生活を取り戻すために、今まで以上にコロナ禍で変化している子どもを理解する必要がある。

今年も子どもたちの不登校、いじめ、自殺の増加が報告された。日本社会では引きこもりの増加、高齢者単身世帯の増加など、人々の孤立と貧困は増加し生活困難者に対する手立ては進んでいない。子どもたちが希望を持って進路選択できるような未来に向けて、私たちは現場で何ができるのか考えていかななくてはならない。

【子どもの主体性を尊重する】

今年は6本の実践報告があり、各地域の学校の様子や子どもたちの実態の交流、そして実践報告から学ぶことができた。討議の中で、保健室来室する子どもとの関わりについての話題では、保健室で子どもに考えさせることを大事にしたい、自分のからだの管理ができるよう保健指導を行いながら、自分のからだの主体者として自ら考えて行動できるようになってもらいたいという発言があった。教師からの一方的な指導だけでなく、子どもに考えさせる時間をとりそこから丁寧に指導しているのは各レポートに見えるところであり、それは子どもの力を引き出すことにつながっている。子どもの力を信じ、時間をかけて丁寧に教育活動を行っていくことが重要であることが確認できた。

Hさんのレポートに今の高校生たちの声がある。「政府へ、オリンピックやるのだったら私たちの学校行事返して」「改善方法なんて求めてないからまず寄り添ってほしい」子どもたちは、自分で考え行動したいと思っている。その力を信じて寄り添い見守ることがもっと必要ではないだろうか。

【つながり】

コロナ禍であるからこそ、人とのつながりを今まで以上に意識したい。人が人とつながることでより大きな力に変化していく。学校はそんなつながりのための場でもある。自分一人の考えではなく人の意見や考えを聞き、自分の考えと照らし合わせ学んでいく。その営みが子どもたちの成長を大きくしていく。レポートの中では班学習や委員会活動の中で自然と

そのような活動がなされているがゆえ、教育的効果があり、子どもたちの変化成長につながっていく場面がたくさんあった。つながりの重要性は教師集団にも言えることで、Tさんのレポートにあるとおり困難事例であっても情報共有し複数で対応していけば、なんらかの道は開かれる。昨今は教師さえも孤立してしまっている職場が散見される。担任とつながり担任を支える養護教諭の姿がレポートの中で見えていることは、私たちの活動の大きな成果であり希望とも言える。

【IT 機器】

ギガスクール構想により学校では一人一台端末の時代がやってきた。これまでに子どものネット依存や IT 機器使用による健康課題については、本分科会でも討議してきた。学習活動に本格的に IT 機器導入となれば、学校では健康教育の観点から使用についての指導がさらに必要となる。視力聴力への影響はもとより、長時間利用による疲労や生活リズムの乱れ等問題は様々であるが、コロナ禍においては遠隔授業の実施等学習に有効であったことが確認され、今後も IT 活用による学習はさらに進むと予想される。学校では使用に関するルール作りと指導が急務である。

4、おわりに

格差社会が色濃くなり、Hさんの言う「ハウスはあるがホームはない」人たち「社会的養護」を必要としている人たちが増加している。

コロナ禍においては、経済的に困窮する家庭が増え、感染不安等保護者の生活にも多大な影響を与えている。そんな中で保健室では、目の前の子どもたちに寄り添い支援することが今まで以上に求められている。私たちは子どもの実態をつかみ、それを交流し実践から学び合うことを長年継続してきた。子どもの実態からはじまる保健室づくりは「子どものための学校づくり」につながっている。

昨今の学校現場では、教師も子どもも多忙であり、子どもの自主性を尊重し子どもの成長をじっくり待つ時間の余裕が減り、子ども一人一人の個性を伸ばす教育活動を行うことが難しくなっているのではないだろうか。授業時間確保のため、長期休業を削って授業を行い、高校では土日返上で模試や検定試験、部活動を行う。果たして子どもたちにとって豊かな子ども時代を過ごすことができる学校になっているのだろうか。

保健室的まなざしを全校に広げ、子どもたちの声に耳を傾け、子どもたちが生き生きと学校生活を送ることができるように、私たちはさらに保健実践を展開し、仲間とともに学び合うことを継続する必要がある。今回は二年ぶりの分科会を ZOOM 開催で実現し、参加者の皆さんと討議を深めることができた。小中学校それから高校の実践報告もあり北海道の子どもたちの状況を多面的に分析することができた。

コロナ禍で研究会等の開催が停滞している中であるからこそ、次年度も多くの参加をお

願いたい。実践報告は形を問わず、保健室での子どもとの何気ないやりとりを綴ったもので十分である。そこから今の子どもたちの実態が見えてくるであろうし、養護教諭の願いと実践の展開が望めると考える。全道の保健室からの声をあげていただきたい。そして対面で分科会開催できることを期待し次年度につなげるものである。(北海道旭川商業高等学校)